

8月後半になり蝉の声も変わってきたかなと思っていましたら、早や9月が訪れました。9月と言えば、以前は台風の多くが9月以降に日本列島に襲来し、多大な災害をもたらしてきた記憶があります。近年では台風よりも「線状降水帯」なるものによる集中豪雨被害が多発している印象があり、こうした自然災害に対する備えには一定の限界もあり、なかなか一筋縄では行きません。ただ、国・地方レベルや地域・各家庭レベル等、種々の段階で常に再検討していく必要性はあり、機会を捉え、改めて一人ひとりの防災に対する意識を高めることは大切でしょう。

一方で、自然災害ではなく人為的な大きな災害の一つとしては、ウクライナ戦争が現在も続いており、勃発から6か月が過ぎ、一向に休戦や停戦の兆しが見えない状況です。何とか休戦等に移行できないかと思えます。国の安全や人権問題、更にはエネルギーや食糧の問題にも波及し、世界経済に対する影響が深刻化している現在、これ以上、世界全体が不安定な状況になることは避けなければなりません。

さて、今月の当倶楽部は、5月に続き「第57回 明るいセミナー」を開催する運びです。

今回は、AKS0041 認証第2号の幸南食糧(株)の川西修会長をお招きいたします。過去に何度も経営危機を乗り越え、新たな挑戦にも取り組む姿をお伝えし、皆様の経営の在り方や人生の考え方等のご参考になればと思っております。どうぞご期待ください。

なお、セミナーの開催に当たっては、オミクロン株等によるコロナ禍の中で、必要な感染拡大防止対策を実施する一方、会員の皆様をはじめ多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

< 9月の送付物 >

- ① 日本一明るい経済新聞 9月号
- ② ビープラッツプレス 最新号
- ③ 明るいセミナーのご案内(ちらし)
- ④ 年会費ご納入のお願い(該当者のみ)



コーヒーショップ内「20冊のほんや」

< 9月の活動予定 >

9/3(土)	気楽な ZOOM サロン(22)	当倶楽部会員専用の交流の場です。	20:00~21:30
9/21(水)	役員会議(27)	「令和4年度の活動計画」	13:30~14:40
9/21(水)	明るいシステム検討会議(10)	「AKS 認証企業への活動状況」	15:00~16:10
9/29(木)	第57回明るいセミナー	大阪産業創造館 4階イベントホール	18:30~21:00

AKS 市民大学 (ZOOM 形式)

9/14(水)	菊池教室(20)	「感性を育む和学講座」	20:00~21:30
9/24(土)	宮崎教室(24)	「愛と善意のことばにも NG ワードが!!」	20:00~21:30
9/28(水)	柴原・松居教室(13)	「みんなで考える明るい職場」	20:00~21:30

◆西国三十三所札所巡り旅 (1) 旅のきっかけ・・・

阿久根 芳臣

はじめに皆さんに観音霊場巡りだからと云ってあまり重たく考えすぎてもらわないように、宗教色を薄めるためにここまでのいきさつをお話ししたいと思います。

最初のきっかけは「告白」(町田康 著) という本からでした。平成27年(2015)頃の事です。

この「告白」は、明治中期に実際に大阪の千早赤阪村方面であった「河内十人切り」をモデルにした話題作で、平成の名著でも3本の指に入るほどの評価の高い傑作小説であり、この事件は河内音頭でも題材として唄われているそうです。

富田林や河内長野、奈良の御所(ごせ)から五條、和歌山の橋本あたりまでを生活圈としていた当時の市井の人々の生活に思いをはせることができる秀逸な本でもあります。

その読後感から抜けきれず、当時の様子を探りに出かけて行きたくなり作中に登場する「葛城一言主神社」や「高鴨神社」に足を運び同じ空気を吸ってみたくなったのです。20～30キロの地道を平気で日常の様に歩いていた当時の様に「正味のせっちゃん」に会えないかな?と期待して訪れてしまうのです。

そうやって葛城山系を行ったり来たり史跡めぐりをしているうちに、司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズに出会い、北は京都・京北の「スタスタ道」、朽木街道から東は中部の知多半島まで遠征して足が長くなり、ついには毎週末に近畿一円を妻と一緒に徘徊するようになっていったのでした。

毎回司馬さんと記者、画師が歩いたとおりに道を探して歩くのですが、スタート地点までの車中では後席の妻が今日行くところのページを朗読して聴かせドライブがてら「司馬史観」についての談義を交えて当時の風景に「溶け込んでいく」そんな感じでしょうか。

「司馬史観」については賛否両論ありますが、その物語が魅力的で大衆の心をつかみ、真実に裏打ちされた史実だと勘違いさせてしまう程に完成された作品であったがゆえに批判的にされやすいのが、いわゆる「司馬史観」であると考えています。

そうやって訪ねる処が増えてくると、夫婦で頭の整理が出来なくなり話が合わなくなってしまうので、訪問記録として「御朱印帳」を貰って整理していくようになる訳でした。

そうして東京勤務と大病が重なった為に中断していた遠征をコロナ明けから再開しようとして、今回の「西国三十三所観音霊場めぐり」にたどり着いた訳です。

以上のように、もとは気軽な発想からの思い付きで始まった巡礼旅ですから、気軽に楽しんでいこうと思います。勿論、納経帳や納札などの巡礼セットも揃えて準備しました。

ここで巡礼の順番のようですが、そもそも三十三所の順路は昔から色々あり、最も古い天台座主(ざす)の「巡拝手中記」や長谷僧正の「参詣次第」、覚忠大僧正の「巡礼記」などでも、順序は全く異なっており他にも色々あったようです。ですから、札所番号順にとらわれずに令和版「車で巡る西国三十三所」として、燃料費の安いEV車の充電基地を最優先にした楽々巡礼旅にしたいと思います。

特に遠い1番「青岸渡寺」、27番「圓教寺」、28番「成相寺」、33番「華嚴寺」では宿泊を伴う巡礼となるかもしれませんが、出来るだけ高速道路を利用して「オートパイロット」を駆使した“門前まで車で往く令和版楽ちん巡礼”を実践し紹介したいと思います。

◆西国三十三所札所巡り旅 (2) 西国第 1 番札所 那智山「青岸渡寺」

阿久根 芳臣

行程：205 km (阪和道、紀勢道)

宿泊先：Hotel&Resorts WAKAYAMA - KUSHIMOTO

(急速充電器 1 基、普通充電器 2 基 予約不要)

青岸渡寺は「那智の大滝」、「那智の黒石」で有名な和歌山県那智勝浦町にあります。昔は大阪からの道路事情も悪く、たぶん国鉄「紀勢線」の特急くろしお号で和歌山市～白浜経由で串本町泊りのルートだったのでしょいか？

現在はすさみ町まで高速道路が延びており、途中白浜の手前の「みなべ町」あたりから片側一車線になりつつも大阪市内からだとも 4 時間ほどで門前まで行ける様になっています。一般道 (国道 4 2 号) も串本を過ぎて太地町あたりからバイパスが出来ており那智勝浦 IC で降り左折して山道をゆくと右側の車窓に那智大滝が目飛び込んでくる。日光の華巖の滝とともに日本でもっとも名高い滝で落差は実に 133 メートルあるという。これは甲子園球場の本塁からバックスクリーンまでの距離 (118m) より長いわけで、グラウンドを縦にしたと想像するとそのすごさを実感するすごさだ。

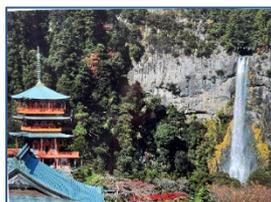
しばらく行くと青岸渡寺の参道入口があり延々と上へ続く長い石段が立ちはだかる。昔の人は大変だったろう、本堂まで 450 段余りとか (四国・金毘羅山は 750 余段らしい) 聞けば傾斜も急で途中から膝も上がらなくなってくるほどの苦行らしい。だが心配は要りません、安心して下さい。お年寄りに親切な現在では、てっぺんにある本堂脇の駐車場まで車で行ける。但し、通行料が駐車料金として拝観料とは別途に 800 円必要となりますが。

本堂脇の駐車場からは開けた広場があり眺めもよく、左手の三重塔から原生林の緑と那智大滝の全景を眺めることができる。その美しさに息をのむ思いだ。大阪から随分と南に来たものだが、8 月にもかかわらず日陰に入らずとも平気だ。海風のせい少し涼しいのは滝からの白い飛沫がたてる水音も影響しているのかもと思う。

さっそく本堂で本尊「如意輪観世音菩薩」に合掌、焼香の後、納経帳に記帳を頂き納札を納めた。開基縁起などについては様々なインターネット環境下で簡単に調べることができる状況であるのでここでは私が特に記すことはせず、省略いたします。

次に「大滝」のもとへと車で移動してから、少し階段を下りて行くと、昔懐かしい”昭和の観光名所”のような滝元の広場にたどり着いた。何十年も変わらないであろう風景がそこにあった。しばらく瀑布の冷風を浴びながら五十数年前に写真で見た滝前で撮った親の会社の団体記念写真をなぜか思い出し随分と懐かしく思った。

自宅を午前九時に出てから六時間、午後三時を過ぎて宿泊先の串本のホテルへ向かう。



” 79歳、わたしと息子との感動の初キャンプ ”

黒田 能弘

前回（8月号）からこの紙面を拝借し、投稿をさせていただいています。
ご高覧いただければ幸いです。

本年は、生涯の記憶にとどめたい感動の夏休みとなりました。

それは、息子と2人、岐阜県可児市のキャンプ場に行った体験です。

息子といっても、50歳になろうとしている独り身の名古屋で勤務する気楽な中年です。キャンプ用品をレンタカーに積み込み、息子の運転で連れて行ってもらいました。（わたしは免許証を返上しているものですから）

なぜ、キャンプに行ったのか？

シヨク

それは、息子と久し振りに火を起し、料理を一緒に作って食す共同作業を試みたかったからです。その動機となったのは、唐突ですが、実は「安倍元首相の銃撃事件」です。あの41歳の若者の生い立ちを報道で知るにつけ、親子の関係を尋常とするには、忘れていた大切な事柄があることに気づいたからです。

今のうちに息子ともっと話しをしよう！ もっと、わたしの想いを素直に伝えよう！
今のあいだに・・・。

「お父さんはな～」と話しかけると、何か教訓的な言葉となって生じるものですから、「わたしはな～」と、できるだけ親子ではなく、友だちのように話したかったのですが、実際には中々に難しく、話したいことの半分も言っていません。なぜなのでしょう？

親子とは、なぜに恥ずかしいのか？ 何がテレくさいのか？ 何か、最近の密になってはいけなないと、プラスチック板があいだにあるように思えてなりません。いやいや、このままでは会話が成立しない。そこで、わたしは態度を改めました。わたしがエラそうに話しをするよりも、息子の話しをじっくり聞いてやることに徹したのです。

こちらは無になって、相手の話しに関心をもって聞いてあげること。息子を一人前の大人として接してやること。そんなわたしの心情の変化が相手を動かしたようです。

夜になり、テントの中で2人並んで寝たところ、息子の方から話しかけてきたのです。仕事のことや、友だちのこと、メダカを育てていることなどなど。

夜空の星のせいでしょうか。こんな親子の会話は久し振り。とても嬉しかった。

旅の終わりに、用意していた一冊の本『ありがとうの教科書』（著・武田双雲）を渡してきました。わたしの伝えたいことは、この本にすべて書いてあるからです。

（ NPO法人 高齢者・障がい者後見人の会 代表理事 ）